

絵本と生育歴

— 家庭で養育されている幼児の反応についての検討 —

川瀬良美^{*1}, 大曾根貴子^{*2}

本研究の発端は、高い評判を得ている絵本「あさになったので まどをあけますよ」(荒井, 2011) に対して乳児院の子どもの中に強く拒否する子ども達があったことから、この絵本への拒否反応は子どもの被虐待経験をもつという生育歴と関連しているのではないかと考え、原因について4つの仮説(川瀬他, 2015)を提出した。本研究では、拒否的な反応は乳児院の被虐待経験をもつ幼児に特徴的な反応であるのかを検討するために、保育園に通園している家庭児を対象に対象絵本への反応を検討した。その結果、対象絵本への拒否反応を示した1名の2歳児について4つの仮説から検討した結果、家庭で実親に養育されているにもかかわらず仮説が支持された。本研究結果から、対象絵本への拒否反応は乳児院の乳幼児特有の反応とは云えず、対象絵本への反応によって家庭児についても発達支援の必要性を見分ける指標とすることが可能であることが示唆された。

キーワード：絵本，生育歴，被虐待経験，家庭児

はじめに

子どもはいつ頃から絵本に出会うのかの調査によると、38.6%の親は4ヶ月時点で「子どもと一緒に見たり読み聞かせをしている」との結果があった。また「きょうだいが見る時に一緒に見ている」の18.6%を合わせると、4ヶ月児の約6割近くが絵本と接していて、大半の親は1歳前から子どもが絵本を楽しめると考えていた(横山・秋田, 2002)。乳児はまず絵本を触つてものとして扱い、その後、見知ったものへの指差しや身振りなど、自らの身体を介して絵本の絵にかかわる。そして絵本に描かれた文字や言葉に出会う過程を2～3歳頃までに経験する(秋田,

※1 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

※2 聖愛乳児園 淑徳大学大学院総合福祉研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了

2004)。このような絵本との出会いの経験は、心身の発達段階に合わせた過程であり、また、そこで絵本を提供することを仲介する大人の存在が不可欠である。その大人は、多くの場合は母親である。

本研究の発端は、乳児院に勤務する臨床心理士が、我が子が毎晩読んでほしいとせがむほど大好きな絵本を乳児院の子どもにも読む機会を与えてあげたいと導入したところ、強く拒否する子ども達がいたことに着目した。この絵本への拒否反応は子どもの生育歴と関連しているのではないかと考え、この反応を手がかりに被虐待乳幼児への支援が可能になるのではないかとの問題意識から一連の研究をスタートさせた。

本研究は、淑徳大学研究倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号 2014-102）。

問題と目的

乳児院で養育されている幼児が、子どものみならず親や評論家からも高い評判を得ている絵本に対して拒否的な反応をしたことから、絵本への拒否的な反応の原因が生育歴と関連しているのではないかと考えられた。対象となった絵本は、絵本作家荒井良二氏が東日本大震災に被災した子ども達を励ますために、「希望」をテーマに作成した絵本『あさになったので まどをあけますよ』（荒井，2011）であった。その本のテーマが「希望」であったことも印象深く感じられ、対象児達が希望のメッセージを拒否しているかのように思われた。

乳児院で養育されている乳幼児の中には、望まない妊娠として不適切な妊娠期間を過ごしたり、妊娠中の健診が未受診であったなどの報告が少なくない。また、その生育歴において被虐待経験など不適切な養育環境での生育経験をもつ。このような妊娠中の問題のみならず出生後の直接・間接の被虐待経験など妊娠・出生・生育にまつわる状況は、発達の抑制要因となる。養護施設の3歳児を対象にした調査結果では、発達の遅滞・偏り、アタッチメント、感覚統合、あるいは獲得されたトラウマなどの問題が明らかにされている（岡田・大久保，2008）。これらの知見からみて、対象絵本を拒否した子どもにもそのような問題があったことが推察される。そのような生育歴と対象絵本のもつ特性が複合的に作用して拒否反応となっていることが仮定できる。そこで研究Ⅰとして、仮説1「生育過程での絵本との出会いの無かったことの影響」、仮説2「母親とのアタッチメント問題の影響」、仮説3「乳児院で養育されなければならなかった状況と被虐待経験による発達への影響」、仮説4「絵本のもつ特性の影響」という4つの仮説を提出し、その妥当性について文献によって検討した（川瀬他，2015）。しかし、このような拒否反応は乳児院で養育されている幼児に特徴的な反応なのであろうか。家庭で養育されている幼児においても仮説に当てはまる状況に置かれている幼児であれば、同様な拒否反応を示すのであろうか。

そこで、本研究では、保育園に通園している家庭で養育されている2歳児を対象に、家庭児に

おいても対象絵本への拒否反応は起こるのか、もし拒否反応が生じた場合はその幼児に4つの仮説が該当するのかについて検討することを目的とした。

方 法

対象児：関東圏の私立保育園の2歳児クラスに在籍する幼児10名

性 別：男児5名，女児5名

年 齢：平均1歳11ヶ月25日（年齢範囲2歳2ヶ月27日～1歳3ヶ月26日）

調査方法：

1. 保育園で午睡後のおやつのおとで、外遊びの前の自由時間に、クラス担当保育士が、保育室の隅に円卓を置いて、独立したコーナーを設定した。
2. そこに、担当保育士が子どもを一人ずつ導いて円卓の前に座らせ「今日は、新しいご本を読みましょう」との言葉を添えて、それまで見えないように袋に入れてあった対象絵本を取り出して子どもに提示し反応を観察した。
3. 一人あたりの所用時間は、およそ1分から1分30秒であった。
4. 筆者は、事前に数回保育園を訪問し子どもと顔見知りになっておき、子どもの顔が見える位置で反応を記録した。

結 果

結果1：子どもの絵本への反応類型

絵本を見せられた子どもの反応は、以下の4つに分類することができた。

- 反応1：提示された絵本の表紙を見た後、自分からページをめくって絵本の中を見た。繰り返しも含め終わりまで楽しんで、表と裏の表紙の絵について保育士の質問に答え、保育士が終わりを告げて終了した。
- 反応2：提示された絵本を見ているが自らページをめくって中を見ることはない。保育士の口添えによってページをめくり終わりまで見て、表と裏の表紙について保育士の質問に答え、保育士が終わり告げて終了した。
- 反応3：提示された絵本を見るように促されて見たが、見たくないと言うように目をそらした。保育士に見るように促されて見るが積極的に手にとって見ようとはしなかった。保育士主導で絵本を見ているが終りたい意志をそれとなく態度で示したが自ら立ち去ることはせず、保育士が終わりを告げて終了した。
- 反応4：提示された絵本を見るように促されても目を逸らして見ようとしなかった。保育士の促しにイヤイヤをして拒否の意思を表した。立って去ろうとするところを抱き留められて見るように促す保育士に対して、大声で泣いて強い拒否の意思を示した。

結果2：子どもの基本的属性と反応類型および保育士からみた行動と性格の特徴

対象とした10名の幼児の基本的属性と反応類型および保育士からみた行動と性格の特徴は表1に示した通りであった。

表1より、絵本への反応は、絵本を積極的に楽しんだ反応1は女児3名、男児3名の合計6名であった。保育士の誘導を受けて楽しめた反応2は男児1名。消極的な拒否を示した反応3は女児2名、強い拒否を示した反応4は男児1名であった。

今回の結果では、自から楽しめる反応1は、男女が同数であり性別による傾向は示されなかった。また、生活年齢が高いと云える結果も示されなかった。反応2、反応3、反応4の結果からも、性別、生活年齢などによる一定の傾向は示されなかった。また、保育士からみた行動や性格の特徴からも、明らかな傾向があるとは云えなかった。しかし、特徴的なこととして特記できることは、反応3と反応4を示した3名は、保育士が膝にだっこして調査を遂行したことである。言葉による指示によって一人でテーブルに向かって新しい絵本を見ることに取り組めた反応1と反応2の7名とは明らかに異なっていた。それは直感的な保育士の判断であったと思われるが、「人見知り」、「自分のエリアに入られると泣いて訴える」、「新しい環境変化についていけない」というこれらの児の示す特徴からとられた対応と考えられた。反応3を示した2名は、保育士の膝にいて、新しい取り組みを最後まで終えることができたことと推察された。その意味で、反応は絵本への拒否反応のみならず、新しい状況への児の性格特徴からの影響もあったと考えられた。

ところで、今回対象とした10名の保育園児の中に、乳児院で養育されている幼児と同様な強い拒否反応（反応4）を示した幼児が1名いた。対象児番号No 4の男児は、保育士に抱かれてテーブルに着いたが、絵本を提示された直後に拒否反応を示した。家庭で養育されているにもかかわらず、泣いて立ち去ろうとした。この反応は、様々な事情から実親と離れて乳児院で養育さ

表1 対象児の基本的属性と反応類型および行動と性格の特徴

No	性別	生活年齢	保育士から見た行動と性格の特徴	反応類型
1	女	2:02	人見知り・慎重	1
2	男	2:02	手が出やすい・誰にでも抱かれる	1
3	女	2:02	人見知り・注意されると固まる	3
4	男	2:01	環境の変化についていけず、泣いて愚図る	4
5	男	2:01	不安定になると午睡時に泣く	1
6	男	2:00	泣き出すと泣き止むのに時間がかかる	1
7	女	1:11	笑顔は見られるが、自分の意志は伝えられない	1
8	女	1:09	自己主張がはっきりしている、指しゃぶりがある	1
9	女	1:03	慎重・自分のエリアに入られると泣いて訴える	3
10	男	1:11	午睡前興奮し、立ったりじっとできない	2

れている幼児が示した反応と類似であった。

そこでこの幼児を対象に、絵本を拒否する原因となると考えられる生育歴についての4つの仮説（川瀬他，2015）によって事例検討をおこなう。

事例検討

対象絵本に対して強い拒否反応（反応4）を示した幼児1名について、絵本の拒否反応に対する4つの仮説が該当するか検討した。

対象児：ケースNo 4 A児（仮名）

性別：男児

調査時年齢：2歳01ヶ月（在園3ヶ月）

生育歴（保育園の記録から）：第一子，人工栄養，本児1歳11ヶ月時に両親離婚，現在母と2人暮らし，近隣に母方の祖父母在住。

身体発達：定頸：3ヶ月，寝返り：6ヶ月，ハイハイ：9ヶ月，掴まり立ち：11ヶ月，伝い歩き：12ヶ月，始歩：15ヶ月

保育士の記憶による入園頃のエピソード（生活年齢1歳10ヶ月時点）

- ① 入園時に触覚過敏で入園記念の手形が取れなかった，触られるのを嫌がった。
- ② 常温（ぬるい温度）のミルク，お茶が飲めない，冷たい飲み物を好む，飲料がごくごく飲めない。
- ③ 表情がなく，ぶつぶつと独り言を言っていた。
- ④ 言葉は「おはよう」「はい」などのみで，オウム返しをしていた。
- ⑤ 新しい場所，状況，物などに慣れない。
- ⑥ 昼寝の布団の敷く場所が変わったら，泣いて拒否をしてその日は寝られなかった。
- ⑦ 水がかかったら大声を出して怖がった。
- ⑧ 朝，母と別れるとき意思表示ができない，ボーッとしているかあるいは泣いているかのいずれかであった。

園での様子

これらのエピソードから，保育士にとっては気になる子どもであった。どのようなしたらよい関係が形成できるか，そして保育園での生活を楽しんでもらえるか心を砕いているとのことであった。保育園での生活では，ボーとしていることが多く，周りへの関心がなかった。

仮説による検討

川瀬は，乳児院で養育されている幼児の拒否反応に関連する生育歴として4つの仮説を提出した（川瀬他，2015）。それらは，以下の通りである。

- 仮説1 生育過程での絵本との出会いの無かったことの影響
- 仮説2 母親とのアタッチメント問題の影響
- 仮説3 乳児院で養育されなければならなかった状況と被虐待経験による発達への影響：不適切な養育環境による発達上の問題
- 仮説4 対象絵本のもつ特性の影響

仮説による検討結果と考察

結果1 仮説1 生育過程での絵本との出会いの無かったことの影響

A児がこれまでどの程度、絵本との触れ合いがあったかについては、母親への確認ができていない。保育園で観察された様子からは、保育園入園時、絵本に全く関心を示すことは無かった。保育士は、好きな絵本が無かったというより絵本に全く興味・関心が無いという印象であったと述べた。入園後、保育士が絵本に触れる機会を与えることによって園に備え付けの絵本を手にとることはあるが、現在でも関心をもって自ら手に取ることは無いとのことであった。本児の絵本への関わりから、絵本への関心がない、あるいは絵本を楽しむという経験が育っていなかったことが推察できた。

親は、子どもは1歳前後から絵本を楽しめると考えて、乳幼児期の早い時期から絵本に触れる機会を与える（横山他，2002）。乳児は、絵本を物としてさわったり、かじったりして絵本と出会う。幼児期になると言葉の発達も伴って絵本の中に知っている物を見つけて指さしたり、声に出して言ったりする。このように子どもは、発達段階に添った絵本との関わりから楽しみを経験していく。これら絵本を経験する過程では、親が重要な役割を果たす。まずは、絵本を子どもに与えること、どのように楽しむかを段階を追って経験させること。子どもは、それらの経験から本の楽しみを感じとっていく（秋田，2004）。この過程の中では、母と子で絵本を楽しむことで母子の相互的関わりが繰り返される。その結果、親子関係の安定が絵本の読み方にも違いをもたらす（Bus，2003，秋田，2004）。

A児が、絵本に関心を示さなかったことは、本の楽しみを感じとるまでの経験を持っていなかったことによって絵本への関心が育っていなかったことを示唆している。また、絵本を介しての母親との相互的関わりがなかったことによって、絵本が母を想起させる懐かしい思い出の対象となっていなかったのではないかとすることも推察される。

以上の結果から、「仮説1 生育過程での絵本との出会いの無かったことの影響」という仮説は支持された。

結果2 仮説2 母親とのアタッチメント問題の影響

アタッチメント問題については、問題の有無を確認するために保育園でのアタッチメント行動について、担当保育士に愛着行動チェックリスト（ABCL）で評定してもらった。保育所児の保

育士に対するアタッチメントの特徴は母子間におけるアタッチメントと本質的な差異はなかったとの研究結果があることから（近藤，2007），保育園でのアタッチメント行動から母子間のアタッチメントを推察することができるだろう。

愛着行動チェックリスト（ABCL）は、乳幼児のアタッチメント行動を評定するために開発された尺度（青木，2007，青木他，2014）で、「安全基地」7項目、「心の理解」9項目、「非安全の愛着行動」9項目から構成されている。評定は「全く当てはまらない：1」から「よく当てはまる：5」までの5段階で評定して、各カテゴリーごとの平均値を算出する。よって、5から1までの平均値が高いほど安定したアタッチメント行動を示していると判断することができる。

ABCLの評定に際しては、保育士の評定基準を確認するために絵本の調査で対象となった10名の幼児すべてについて、絵本の調査時点での行動によって評定してもらった。保育士の評定については、母親の評定と比較して統計的な有意差は無かったとの研究結果もあり（青木他，2014），この結果から母親との愛着関係を推察することができるだろう。結果を反応別に整理して表2に示した。

表2より、保育士が評定した2歳児10名のABCLの評定値から、A児についての評定結果は「安全基地」（M=2.14）、「心の理解」（M=2.33）のいずれも他児と比較しても評価点が低く、安定したアタッチメント行動がみられないと云えた。困った時や要求があるときに助けを求めたり頼るなど保育士を「安全の基地」とすることができていないことが示された。また、「こころの理解」においても保育士の意図を理解したり、保育士に気持ちを伝えたりする行動は低い評価であった。先行研究結果で（青木他，2007），母親および保育士のいずれの評価においても平均値は3点台から4点台であったことから見てもA児のアタッチメント行動には問題があると云え

表2 愛着行動チェックリスト（ABCL）結果

反応類型	ケースNo	安全基地	心の理解	非安全の愛着行動
反応1	ケース1	4.00	4.67	1.22
	ケース2	3.43	4.22	2.44
	ケース5	4.14	4.56	2.78
	ケース6	4.00	4.56	2.44
	ケース7	3.57	4.33	2.00
	ケース8	4.71	4.00	4.56
反応2	ケース10	3.14	2.78	3.11
反応3	ケース3	3.86	3.78	2.44
	ケース9	4.43	3.78	3.56
反応4	A児（ケース4）	2.14	2.33	2.33

た。また、「非安全の愛着行動」も2点台の平均値であったが、このカテゴリーは10名の評価においても「安全基地」、「心の理解」のカテゴリーと比較して低い評価であった。このカテゴリーの評価において、保育士の判断に子どもの性格や生活習慣などから示される愛着行動以外の他の要素が判断基準に含まれていたのではないかと推察された。しかし、A児はこの「非安全の愛着行動」も低い結果であり、他の2つのカテゴリー評価の結果を併せて考えると、保育士へ安定した愛着行動を示していないことから、母親との愛着関係にも問題があることが示唆された。

改めて入園時でのエピソードを確認してみると、「⑧朝、母と別れるとき意思表示ができない、ポーッとしているか泣いているかのいずれかであった。」との記述がある。母親との愛着関係を基礎として、二次的な対象として保育園での保育士との愛着が形成されることを考えるならば、保育士に示されている愛着行動の問題は、母親との愛着関係の問題を反映していると考えることができた。

愛着の本質的機能は、危機的な事態において安全感、安心感、慰安をもたらすような関係性である(庄司, 2008)。安定したアタッチメントが形成されることで、不安な気持ちになっても守ってもらえるとの確信によって探索行動が喚起され、新奇な状況でも不安を乗り越えて挑戦することができる。絵本の調査において反応2および反応3の対象児は、はじめは消極的でも保育士の励ましや援助によって新しい絵本を見ることに取り組むことができた。それは、保育士を安全基地とし、その心を理解して課題をこなしたと考えることができる。それらの結果と比較しても、A児は保育士を安全の基地として新しい絵本をみるという挑戦に取り組むことができず、A児の愛着形成には課題があることが示された。また、愛着の問題は視覚的な刺激への反応しやすさと関連しており(岡田・大久保, 2007)、アタッチメント問題は不安、情動の問題のみならず、易刺激性などの問題も生じさせている。これらの結果から、アタッチメント問題に関連して対象絵本が拒否する刺激となったと考えることもできる。

以上の結果から、「仮説2母親とのアタッチメント問題の影響」という仮説は支持された。

結果3 仮説3 不適切な養育環境による発達問題

A児は、乳児院で養育されてはおらず、被虐待経験も報告されていない。しかし、その生育過程で発達に影響するような不適切な養育環境があったかについて検討する。A児の生育過程でどのような不適切な養育環境があったかについては、直接、母親に確認することはできていない。母親は、A児が研究に参加することは了解しているが、個別の面談を行うことは仕事と育児が多忙であるために機会を持つことができなかった。母親が多忙であるのは、A児が1歳10ヶ月時に離婚をし、シングルマザーとしてフルタイム就労をしていることによる。母親は、働きながらA児を養育するために実家の近くに転居し、それを機にA児は保育園へ入園した。離婚のいきさつや、その決定までにA児がどのような養育環境におかれたかの詳細は不明である。しかし、夫との離婚を検討する中で、子どもの誕生を喜び、子どもとじっくり向き合いながら、日々の成長を

楽しむ状況があったであろうか。離婚に至るまでの母親の心境は、安心して育児に専念できなかったであろうことは容易に推察できる。そのような状況は、養育環境として乳児期から幼児期初期に不可欠である母親とのアタッチメント形成に影響を与え、保育士が評定したアタッチメント行動の結果から問題であることが推察できる。このように安定したアタッチメントが形成されることが困難であった養育環境が推察されることから、養育に問題のある子どもの特徴を示しているのではないかと考えられる。

そこで、保育士にA児の入園時点（1歳11ヶ月）の様子を回顧してもらい、「養育に問題のある子どものためのチェックリスト：CMYC」（泉他，2009）で評定してもらった。この尺度は、24ヶ月未満の子どもを対象に「トラウマ」7項目、「愛着」16項目、「行動・感覚・調節」4項目の27項目から構成されており、「1. ない」から「4. よくある」までの4段階で評定する。保育士は専門の訓練を受けていないことから参考資料であるが、結果を表3に示した。

表3より、「トラウマ」「愛着」「行動・感覚・調節」そして「総合点」のいずれにおいても介入域の得点となり、この結果からは養育に問題があった可能性が示唆された。

CMYCで「よくある：4」と評価された項目は、「トラウマ」の項目から「特定の状況で、急に激しく泣く」「些細なことでびくびくして不安そう」「急に泣き出したら止まらない」「ひとりで遊んでいることが多い」、 「愛着」の項目から「慰められても気持ちが落ち着かない」「ちょっとしたことで怖って自由に遊ばない」「特別な大人に抱かれていても、遠くをボーと見ている」「突然固まって、ボーとした表情をする」「嫌なことがあると固まってしまう」「凍りついた目、あるいはうつろな目をしている」、 「行動・感覚・調節」の項目から「すぐに激しい泣き方になる」が該当した。奥山（2008）は、虐待を受けた子どもの理解には、アタッチメントとトラウマの問題の相互関係という視点をもって取り組む必要があるとして、アタッチメント問題—トラウマ複合（Attachment Problems-Trauma Complex; ATC）と名付けた。A児のCMYCの結果から示された臨床像は、虐待を受けアタッチメントとトラウマ問題をもった子どもの臨床像と重なる。必要とする時に安心のできる大人からの慰めを経験しておらず、守られている実感がなくおびえている姿が推察された。

入園後の生活においてA児が保育園で過ごす時間は、早朝保育午前7時から、延長保育午後8時までである。朝は、母の就業開始に間に合わせるために、保育園の開園時間を待ってA児を預けて仕事に出かける。退園時も閉園時間ぎりぎりに慌ただしく迎えに来る。母親は、生活のため

表3 養育に問題のある子どものためのチェックリスト（CMYC）結果（参考）

絵本反応	対 象	トラウマ	愛 着	行動・感覚・調節	総合点
	A児	23**	50**	10**	83**

*境界域, **介入域

に仕事と育児を一所懸命にこなしている。そこには、必死に働きながら子育てをしている母親の姿がある。しかしA児の誕生から現在までの養育環境は、家庭で母親に養育されているとはいえ、状況としては様々な問題があり、A児にとって養育に適切な環境ではなかった可能性が推察される。A児にとっては欲求を十分に満たしてもらうことができず、ネグレクトに該当するような状況を経験していたのかもしれない。

A児についてのアセスメント結果では、愛着および養育に問題があることが示された。不適切な養育環境に育ち養護施設にいる幼児の約7割に感覚統合障害が存在し、「前庭機能に関する問題」を有する児童が6割以上存在した。この発達には乳児期に抱っこされ身体を支えられる経験が関係しているという（星野，2005）。

そこで参考までにA児を対象にJapanese Sensory Inventory Revised (JSI-R)（太田他，2002）によって感覚統合に問題があるか保育士に評定してもらった。この尺度は、「前庭感覚」30項目、「触覚」44項目、「筋肉・関節の感覚（固有受容覚）」11項目、「聴覚」15項目、「視覚」20項目、「嗅覚」5項目、「味覚」6項目、「その他」16項目、合計147項目で構成されている。評定は「0：まったくない」から「4：いつもある」の5段階でおこなう。各下位感覚についてカットオフ値が示されている。この評定には高い専門性が求められるので、担当保育士は訓練を受けていないことから参考資料とするが、結果を表4に示した。

表4より、前庭感覚は危険域を示し、触覚、味覚、その他、そして合計が介入域であった。「頻繁にある：3」～「いつもある：4」と評価された項目をみると、動きを感じずる感覚である「前庭感覚」では「安全な高さでも、飛び降りることができない：3」「空中に抱き抱えられたりすることを怖がる：4」、「いつも体を硬くして、頭、首、肩などの動きが硬い：3」、「頭より高いところに手を伸ばすことを避ける：4」、「理由もなく周囲をうろろうろしたり、動き回ったりしていることが多い：3」、触覚では「体に触られることに非常に敏感である：3」、「そばに人が近づくと、すっと逃げる：3」、「粘度、水、泥、砂などでの遊びを嫌がる：3」、「手や足が少しでも汚れることを嫌がる：3」、「よだれや鼻水に気がつかないことがある：3」、味覚では「ある種の味をとくに嫌う：4」、その他では「新しい場面になかなかじめない：4」、などが指摘されていた。これらの結果からは、入園時のエピソードとも重なるところがあり、A児に感覚受容における偏りがあることが示唆された。これら感覚に関する問題は、身体生理的な問題と

表4 A児のJSI-Rの評定結果（参考）

項目	前庭感覚	触覚	固有受容覚	聴覚	視覚	嗅覚	味覚	その他	総合点
評価点	43**	38*	1	3	10	0	7*	20*	122*

*若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推察される（健常児の20%にみられる状態）

**感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推察される状態。刺激に対して過敏であったり、鈍感である状態（健常児の約5%に見られる状態）

も関連して姿勢・運動発達、認知発達、言語発達、社会性と適応など発達全般に影響するであろう。

安定したアタッチメントを形成して心身の成長を保証する養育環境が保証されていなかったことと、併せて感覚受容に偏りがあったことが考えられ「仮説3 不適切な養育環境による発達問題」という仮説は支持された。

結果4 仮説4 対象絵本のもつ特性の影響

対象絵本は、荒井良二著「あさになったので まどをあけますよ」（荒井，2011）である。荒井氏の作品についての評として「大胆な発想と様々な技法を駆使して絵本の固定概念を覆してきた。想像力を刺激する荒井ワールドは大人から子どもまで多くの読者を魅了している。」（NHK，2013）と語られる。この論評からみても荒井氏の絵本は定型の子ども絵本とは異なっていることが推察される。しかし、この型破りと評される作品が子どものみならず大人も含めた多くの人々に好まれている。対象絵本の表紙は、白と赤で花の絵が描かれており、その鉢と背景は、白・黄・橙・桃・水色・青・薄紫などで塗られている。それらの色は部分的に相互に重なり合い、パステルカラーがグラデーションになっていて虹のようである。一方、描かれた花や葉に輪郭は無く、物の形態のデフォルメや抽象化の経験を基礎に認知しなければならない。大胆な発想と様々な技法を駆使して絵本の固定概念を覆してきたと評される荒井氏の作品は五感を刺激し、童心が溢れているとも評される。その絵は色使いのみならず、描画法によっても想像力を刺激されるものである。

そのような荒井氏の絵本の特性が不快刺激として拒否させるのかを検討するために、荒井氏の作品のなかで対象絵本と異なった絵の要素をもつ絵本を選んだ。輪郭がある絵の絵本「ヒメちゃん」、おなじみの動物（ひよこ）が描かれている絵本「はっぴいさん」、用いられている色彩数が少ない絵本「空の絵本」など、3冊を提示して観察した。結果は、3冊のいずれに対してもイヤイヤと首を強く振って拒否反応を示した。1週間後にさりげなく保育士が再提示すると、保育士の顔をじっと見つめて本をもつ保育士の手を振り払った。その様子は「これは嫌だって知っているでしょ」と怒っているようにも感じられた。荒井氏の絵本には対象絵本のみならず、他の絵本もA児には好ましく感じられなかったようであった。

A児は、保育園で自ら絵本を求めることはないが、置いてあれば手にとってみるようになった。その後、繰り返して見るようになった絵本（2歳04ヶ月時点）は、「こどものとも0，1，2，あめかな！」（サトー，2009）である。ページをめくる毎に、形・色・形態、図地の構成が段階的に複雑な刺激となるように構成されており、子どもの視覚・知覚・認知能力の発達段階に合わせて楽しめる。絵本の1ページ目に示された絵は2つの点のみで単純な色と形の情報が構成されている。知覚の成立としての図と地の関係は、経験的な学習によって脳の発達に寄与する。単純から複雑へ、その含まれる要素も数を増していく。安定した発達の後には、より複雑で新奇性の

高い刺激が好まれるようになる。保育園で反応1を示した子ども達が、対象絵本を食い入るように見入り、納得いくまで繰り返し見たがって終了を渋った実態がそのことを説明している。対象絵本はその情報の多さと曖昧さで、魅力となっている一方で、それを受容できない場合は過剰刺激となるのではないだろうか。

子どもの色彩の好みは変容するが、各種の色彩と経験の結びつきのうちもっとも快感情が強く生じたものが意識される(相馬, 1967)。色彩の調和というのは、2つ以上の色彩が隣接して存在する場合、それが快感情をもたらすことを指す。快い組み合わせは、属性が等しいもの、類似なもの、および対立するものである(相馬, 1967)が、そこには色彩に関する経験も関与している。これらの色彩の発達と好みについての知見からは、なぜ対象絵本を拒否したかの直接的な説明を得ることはできない。しかし、通常は快刺激となる色の組み合わせが、不快刺激として反応が生じたと考えられる。対象絵本への拒否反応には、視知覚認知能力の発達という問題に加えて心因的な要因の介在も考える必要がある。この拒否反応は、母子関係、被虐待経験とそのトラウマによって喚起された情動が関連して、対象絵本が不快な刺激となったことによる反応と考えることもできる。対象絵本の拒否には、五感を刺激するという荒井氏の絵が複合的問題を抱える子ども達に不快刺激となったのかもしれない。それは、乳児院で養育されている子ども達と同様な問題を抱えた家庭児にも起こりうることをA児の結果が示している。以上の結果から、「仮説4 対象絵本のもつ特性の影響」という仮説は支持された。

結果5 その他 社会性の発達問題「ASDの疑い」

A児には、愛着問題のほかに、養育環境、感覚過敏などの発達問題があることが示唆された。近年、発達障害の臨床像と虐待によってもたらされた発達問題の臨床像が類似していることが指摘されている。A児が示している様々な問題点は、生育環境の影響によって生じたものであるか、あるいは生来的に発達問題があったのかが疑われた。

そこで英国で開発された自閉症・広汎性発達障害の早期発見を目的とした23項目からなるスクリーニング用質問紙で、日本での活用に翻訳されたM-CHAT日本語版(神尾, 2004)について保育士に回答してもらった。A児の入園時(1歳11ヶ月時)と6ヶ月後(2歳04ヶ月時)の2時点でのM-CHAT日本語版による評価を依頼した。

神尾(2004)が、1歳6ヶ月児健診でのカットオフ値において重要視している重要10項目、項目番号2, 6, 7, 9, 13, 14, 15, 20, 21, 23に着目した。加えて、健診10項目の内でも特に重要とされる6項目についても検討した。入園時では「2. 他の子どもに興味がありますか」、「9. あなたに見てほしいモノがある時、それを見せに持ってきますか」、「14. 名前を呼ぶと、反応しますか」、「15. 部屋の中の離れたところにあるおもちゃを指さすと、その方向をみるか」が不合格であったが、在園6ヶ月後では、「2. 他の子どもに興味がない(他児への関心)」のみが不合格である。その他の項目でまだ不合格の項目は、「5. ごっこ遊びをしない(ふり遊び)」

表5 日本語版M-CHATの結果

結 果	入園時*	在園6ヶ月時**
不通過	18	5
通 過	5	18
重要6項目の内の不通過	4	1
検診10項目の内の不通過	6	1

*入園時：生活年齢は1歳11ヶ月

**在園6ヶ月時：生活年齢は2歳4ヶ月

「17. 親が見ているモノを一緒に見る（視線追従）」「19. 注意をひこうとする（親の注意喚起）」
「22. 何もない宙を見たり、目的無くうろうろする（視線反応）」であった。

M-CHAT日本語版による評定では、入園時はASDが疑われる結果であったが、入園半年後では、大半の項目がクリアーされた。しかし、対人相互性と視線そして表象に関する項目がまだ不通過のままであった。この結果は、入園時のASDを疑わせる特徴は、本児が本来的にもっていた発達上の偏りが、それまでの不適切な養育環境によって助長されていたのではないかと考えられた。A児のこのような特徴は、母親に養育困難をもたらしていたことも推察され、その影響もあって結果的にA児にとって不適切養育環境となった可能性も否定できない。この結果からは、A児の発達問題は、被虐待経験などの不適切な養育環境による発達問題は発達障害と類似の臨床像を示すという、どちらが原因か結果かを特定できないとする臨床家達の意見を肯定していた。現状では、その問題の多くが保育園の生活指導によって改善されつつあると見る事ができた。

結 論

1. 対象絵本を拒否する反応は、乳児院の子どもに限ったことではなく、家庭で養育されている幼児にも見られた。
2. 本研究で対象としたA児は、乳児院の子どもを対象として提出した4つの仮説をあてはめて考えることができ、それに関する問題があることが示唆された。この結果から、対象絵本を楽しむには、絵本との出会い、母親との安定したアタッチメントの形成、乳幼児期の心身の健全な発達のための適切な養育環境、発達に合わせて多種多様な絵本との豊富な体験を育んでいくことが必要であると考えられた。
3. 対象絵本への拒否反応には、発達的問題も関与することが示唆された。本研究で対象としたA児は、「社会性の発達」に偏りが示唆された。その問題への気づきが無かったことも養育環境の問題と相互関連して発達を抑制する要因として影響し、絵本体験の発達を阻んでいたと考えられた。今後は、対象絵本を拒否する要因として発達障害の要因も加えて検討する必要がある。

以上のことから、4つの仮説を家庭児にもあてはめることができ、対象絵本を発達支援の必要性を見分ける指標として活用することが可能であると考えられた。

本研究の一部は、FOUR WINDS乳幼児精神保健学会第18回全国学術集会弘前大会（2015）ならびに15thWorld Congress of the World Association for Infant Mental Health, Prague, Czech Republic（2016）において発表した。

文 献

秋田喜代美 2004 子どもの発達と本 市民による読書ネットワークが支える対話的読書. 寺内一郎（編）. 発達 特集 子どもと本の出会い, 1-7.

青木 豊 2007 分担報告書 被虐待乳幼児に対する愛着に方向づけられた治療についての研究「一被虐待乳幼児の発達—特に愛着の形成に関する研究, 奥山真紀子（主任研究者）厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）児童虐待等の子どもの被害, 及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究, 平成19年度報告書：647-664.

青木 豊・南山今日子・福榮太郎・宮戸美樹 2014 アタッチメント行動チェックリスト Attachment Behavior Checklist: ABCLの開発に向けての予備的研究—児童養護施設におけるアタッチメントを評価するために— 小児保健研究, 73(6), 790-797.

荒井良二 2011 あさになったので まどをあけますよ, 偕成社.

Bus, A. 2003 Joint caregiver child storybook reading: A route to literacy development. In Newman, S. & Dickinson, D. (Eds.) Handbook of Early Literacy Research. New York: The Guilford Press, 179-191.

星野崇啓 2005 分担報告書 被虐待児の愛着・トラウマと感覚統合障害との関連性に関する研究 奥山真紀子（主任研究者）厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）児童虐待等の子どもの被害, 及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究, 平成19年度報告書：665-680.

泉真由子・奥山真紀子 2009 養育問題のある子どものためのチェックリスト（Checklist for Maltreated Young Children : CMYC）の開発 小児の精神と神経, 49(2), 121-130.

神尾陽子 2004 自閉症スペクトラム障害の早期発見のポイント：支援につなぐために：発達障害早期総合支援研修資料, 1-44.

川瀬良美・大曾根貴子・大住真理 2015 絵本と生育歴の関連について—乳児院で養育されている幼児への絵本を手がかりとした文献的考察— FOUR WINDS乳幼児精神保健学会誌, 8, 18-25.

近藤清美 2007 保育所児の保育士に対するアタッチメントの特徴—母子関係と比較して—, 北海道医療大学心理科学部研究紀要, 3, 13-23, 2007.

NHK（編）2013 趣味Do楽 荒井良二の絵本じゃあにい 日本放送協会 NHK出版.

太田篤志・土田玲子・宮島奈美恵 2002 感覚チェックリスト改訂版（JSI-R）標準化に関する

研究, 感覚統合障害研究, 9, 45-63.

岡田洋一・大久保貴子 2008 分担研究報告書 被虐待児の愛着・トラウマと感覚統合障害との関連性に関する研究, 奥山真紀子(主任研究者)厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)児童虐待等の子どもの被害, 及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究, 平成19年度報告書, 681-703.

奥山真紀子 2008 第6章 アタッチメントとトラウマ 庄司順一・奥山真紀子・久保田まり(編著)アタッチメント 子どもの虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって 明石書店:143-178.

サトー, U.G. 2009 こどものとも0. 1. 2. あめかな! 福音館.

相馬一郎 1967 色彩と感情. テレビジョン/テレビジョン学会, 856-865.

庄司順一 2008 子どもに対する母親のきずな. 子どもの虐待とネグレクト10(3), 315-321.

横山真貴子・秋田喜代美・ブックスタート支援センター 2002 ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識(2) —4ヵ月時での親の読み聞かせに対する考えと行動—. 日本保育学会大会発表論文集(55):164-165.

The Children's Life History and Picture Books: A Report on the Case Study of a Two Year Old Child who Rejected the Picture Book

Kazumi KAWASE

Takako OOZONE

The picture books of Ryoji Arai are loved by almost all Japanese children. However, in the case of his picture book, "Here, There comes the Sun" it was found that some abused children in infant care facilities responded differently and rejected the book. Four hypotheses related to life history were introduced to examine the causes of these responses (Kawase et al., 2015). The purpose of this study is to analyze the responses of one of the children who rejected the picture book and who, according to the author's hypotheses, appeared to be an abused child, even though he was living with his own mother and not in an infant care facility.

Keywords: picture book, life history, abused child, living with own mother